

4-04 認知症患者における意味のある活動提供を目指して

○田浦 康代(OT)¹⁾, 佐平 安紀子(OT)²⁾

1) 医療法人社団南淡千遙会 南淡路病院

2) 社会福祉法人関西中央福祉会 平成リハビリテーション専門学校

Key word : 認知症, 意味のある作業, BPSD

【はじめに】当院認知症治療病棟(以下, 認知症病棟)における作業療法は集団活動を中心とし, 作業療法士(以下, OTR)が選択した活動を中心に提供している現状であった。個別での介入には限界があり, 活動種目としては, 集団体操やレクリエーション, 創作活動等, 認知症の重症度に差があっても取り組みやすい活動を選択していた。一方で本人主体の活動提供が十分に行えておらず, 介入方法に検討が必要であった。

【目的】本人の希望に添った活動を小グループで提供することにより, 認知機能や精神症状, 日常生活動作に変化がみられるのかを検討し, 今後の作業療法プログラムに繋げることを目的とした。

【対象】認知症病棟に入院中の患者6名(男性3名, 女性3名, 平均年齢 84.3 ± 4.9 歳)のうち, 畑仕事・料理の両者に興味があると判断したものを対象とした。対象者全員, 言語的表出が可能であり, 改訂長谷川式簡易知能評価スケール(以下, HDS-R)の中央値は8点である。

【期間】2019年5月10日～2019年6月14日

【方法】生活行為聞き取りシート, 興味関心チェックシートを家人に依頼し, その結果に基づき個別面接を行い, 聞き取りを実施した。家人・本人の聞き取りが一致したものの中から回答数の多い「畑仕事」「料理」の両者を含んでいる6名を対象とし, クローズでの小集団形式で園芸, 調理活動を実施した。介入前後の評価は, HDS-R, N式老年者用精神状態尺度(以下, NMスケール), N式老年者用日常生活動作評価尺度(以下, N-ADL), 認知症行動傷害尺度(以下, DBD)を比較し, 統計学的処理にはWilcoxonの符号付順位検定を用い, 有意水準は5%未満とした。尚, 本研究は当院倫理規定に則り, 個人情報保護に十分な配慮を行っている。

【結果】介入前後での比較において, DBDでは有意な差が認められた。HDS-R, NMスケールでは点数

変化はあるが有意な差は認められなかった。N-ADLでは前後において点数の変化は見られなかった。患者4名において, HDS-Rの言葉の遅延再生, NMスケールの関心・意欲・交流/会話の項目に点数の向上がみられた。

【考察】今回, 認知症患者の望む作業を検討するにあたり, 家人からの情報に沿った聞き取りを行うことで, 本人の興味のある活動を選択することができた。しかし, 認知機能の重症化に伴い, 興味の判断がつかない場面や一貫性のない場面も見受けられ, 意味のある作業を見出す難しさも実感した。本人の関心の高い作業や馴染みのある作業は手続き記憶を活用でき, 混乱等が少ない状態で作業への集中が行える。作業のもつ心地よい感覚や再体験は, 快刺激となり, 不穏や興奮を軽減しBPSD低下に繋がったのではないかと。また, 自身の作った料理をスタッフに提供する行為は, 主婦としての役割を想起させ, 役割の提供や自尊感情の向上にも繋がったと考えられる。藪脇健司(2015)は対象者の大切な作業が実現するという事は, 単にその作業に必要な動作が可能になるということではなく, その作業に含まれる役割を果たし大切な環境と結びつくということと述べている。「意味のある作業」を実現する為には, その人の生きてきたストーリーを把握し, 具現化された作業を行うことで満足感や充実感を得ることに繋がるのではないだろうか。まず今あるべき姿での興味を探し, その行為に寄り添うことはBPSDの軽減やその人らしい行動変容が起こりうることに繋がると考えられる。今回の介入では座位での活動が中心であった。今後は身体動作向上にも繋がるよう, 生活全体を捉えた上で立位での作業導入等も検討し, 心身共にサポートができる様, 介入を続けたい。